

## 連用形名詞の性質について： 特に人工物を指示する場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 寅弥 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1370">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1370</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 連用形名詞の性質について

——特に人工物を指示する場合——

西 尾 寅 弥

はじめに

動詞の連用形と同じ形（以下これを便宜的に「連用形」と呼ぶこともある）が、接辞を加えることもなく、そのまま名詞に転化することがかなりあり、また、他の名詞などと複合して合成名詞を形成することが非常に多い。これらは、日本語本来の語形成様式の有力なものである。筆者は久しく以前に主に造語力の観点からこの様式について考察し（西尾1961、以下「旧論」とよぶ）、基本的な考えは今も変わっていないが、今回やや別の方法を加え、一つの方向に細かく分析を試みようとした。

## 一 対象の範囲

小論で「連用形名詞」と呼んで考察の対象にする範囲は、次のように設定する。（西尾1961の58～60頁）第一に、「救

い、眺め」のように単純動詞が（Aの形式）、第二に「引き伸ばし、乗り換え」のように複合動詞が（B）、名詞化したものである。第三に、「立ち見、崩し書き、狂い死に」（C）のように、「立ち見る」などの複合動詞は（今は）存在せず、前項が連用修飾的に後項にかかり、後項が全体の意味を代表している複合名詞である。第四に、「乗り降り、売り買い」（D）のように前項と後項が対等に並立し、双方がともに全体の意味にあずかっているものである。以上は連用形だけで成り立っている語であった。第五に「品（ガ）切れ、芝（ヲ）刈り、波（ニ）乗り、かな（デ）書き、親（ヨリ）まさり」（E）のように動詞とそれに結びつく補充語が複合したものがある。「ぐい（ト）飲み、一番（ニ）絞り」のように副詞的なもの、「甘（ク）煮」のように形容詞の語幹が副詞的にはたらくものが前項であるものなども、これに含まれる（E）。「渡り鳥、かすり傷」（F）<sup>（注1）</sup>のように、前項の連用形が連体修飾的に後項の名詞と結びついているものは、対象に入れない。小稿で連用形名詞と呼ぶ対象の範囲は以上のとおり（A↪E）で、連用形名詞だけで成り立っているもの（A↪D）、または連用形名詞の要素が語の全体を代表している語（E）を一まとめにして考えようとするわけである。（西尾1961の60↪62頁）

## 二 有縁性について

小論では、連用形名詞と、そのもとになっている動詞（と名詞など）とのつながりがはつきりしている、有縁性のつよい語を中心に考察する予定である。（西尾1961の62↪64頁）したがって、普通の意味ではなんの変哲もない、分かりきった面白味の乏しい対象を扱っていくことになる。いろいろな様相・程度に有縁性のある語についても、個別的な考究は可能であるが、一般的に論じることがとてもむずかしいだろう。

影山太郎氏は、

名詞は名付けであるから、理論的にはどのような名前をつけてもよいはずであるが、あまりに名と体が乖離し、意味

が不透明になると、言語の習得の点で困難をきたす。(中略) 言語使用者に特別の負担をかけない方法は、名が体を表すように意味を透明にすることであり、(影山1993の192頁)

と述べている。連用形名詞の中には、仮に全体の意味を知らなくても、もとの動詞や語の他の要素の意味を知っていれば、説明なしで大体分かってしまう語も多くある。

「歌舞伎(ハカぶく)」「嵐(ハ荒らす)」のように語源的にのみ連用形名詞であるものは、ここではもとより対象の外にある。「はさみ(鋏)」は「はさむ」から出ていることは意識しやすいが、「はさんで切る」道具であるので、十分に「体を表している名」とは言えないだろう。(「紙挟み」は有縁的) 広告の「チラシ」はもとの動詞の「散らす」がよく使われ、まき散らすように人々に配るものという由来は意識させられやすいだろうが、「散らす」との関係が説明なしで自明とまでは言えまいとみて、参考にするにとどめる。一語一語についての理由は省略するが、「つけ(かけうり)、たしなみ、羽織、見合い、えもん掛け、独りよがり」なども同様の扱いをすることにしている。非常にきびしい基準で有縁性の自明なものを中心に考えていこうとしている。

### 三 動詞の意味の名詞化のされ方

例えば「受け付け」は、「うけつけは済んだ」では「受け付けをする(してもらう)ことは済んだ」ことであるが、「うけつけに聞いた」では係りの人であり、「うけつけで聞いた」では場所である。「受け付ける」という行為から、行為を行う主体である人と、行為の行われる場所に意味が移ったとみられ、密接な関係にある内容に語が転用される「換喩(metonymy)」として説明することができる。抽象名詞から具体名詞へ、飛躍的な変化ではあるが、内的なつながりは十分にあつて、ことばのもつ奔放なおもしろさを感じさせられる。動詞の表す動きなどを中心にして、その主体・対象など、

隣接的な関係にあるさまざまな事象を連用形名詞が表す様相の全貌を明らかにすることは容易でないが、わりあいとらえやすいタイプをいくつか示してみた旧論（西尾1961、以下の傍線の部分は旧論そのままの引用である）の試みをもとに、その補正などという形で現在の考えを述べることにしよう。

## 1 動作・作用など

イ 動作・作用そのもの（何々スルコト）

泳ぎ・調べ・貸出し・繰上げ・寝射ち・乗り降り・格上げ・味つけ

右にあげた語はみな、人間の動作や行為を表す連用形名詞である。スルはこのような意志的な人間の行動をまず連想させやすいが、この項ではスルはシテイル・シタ・ナル・デアルなどまで含めて、非常に広い領域を考える必要があると思う。影山氏が状態や性質を表す語の例として挙げた「肩こり、泥まみれ、子供連れ、蔵出し、明治生まれ・・・」など数十語のようなもの（影山1993の188ページ）も広くスルコトの意味に含めて考えたいのである。

連用形名詞の多くのものがまず「何々スルコト」の意味をもち、また必要に応じてこの意味で作りに出されることも多く（もちろん制約があつて不可能なばあいもあるが）、いちばん基本的で広汎な、典型的な用いられ方である。（西尾1961の63～64頁）

なお、E・ライズイの言う「実体化 (Hypostasierung)」と「*spiel*」と「*tanz*」と「*kauf*」などで注目すべきであろう。ライズイは動詞として叙述される「過程」が、「Spiel (遊び)」、「Tanz (踊り)」、「Kauf (購買)・・・」などの名詞においては「もの」として叙述され、言語による「実体化」が生じているという。（Leisi・鈴木1960の30～31頁）ライズイが対象にしたドイツ語と英語は、日本語とは言語の性質が大きく異なっているけれども、動作などが動詞でなく名詞で表現されると、動作などが対象化されて「もの」的に捉えられる傾向は日本語にも同様にあるのではないか。動詞の「遊ぶ、踊る」は特定の動作の主

体や、いつ、どこで、などの条件がつきまといやすいが、連用形名詞「遊び、踊り」においてはそれらの条件は弱まって、虚構的に、自立性のある「もの」のような意味を帯びやすいのではないか。「各種各様の遊び」「全国の踊りを集める」のような言い方ができることも、それを示唆するのではないか。

ロ 動作・作用の内容〔何々スルトコロノコトガラ〕

考え・教え・望み・願ひ・悩み・祈り

右のような精神活動にかかわりのある動詞の中には、活動自身を表すほかに、活動に含まれている内容・事柄をも意味するものも多くあるようである。「教えを請う」は前者、「先輩の教えを一々守る」は後者と考えられる。

ハ 動作・作用の有様・方法・程度・具合・感じなど

金使い（が荒い）・滑り（がいい）・売れ行き（がすごい）・出来（米の―）

広い意味でスルコトの範囲内で扱いたい、意味のずれの一つである。「出来」<sup>（注2）</sup>に対して、「出来加減、出来具合、出来はえ」のような明示的な類義語もある。

2 動作・作用の所産・結果〔何々シタモノ〕

イ 他動性の動詞から〔何カラ何々シタ結果デキタモノ〕

包み・貯え・揚げ（＝揚げ物）・堀・書付・綴じ込み

「包み」は何かを紙などで包んだ結果としてできあがるものである。

ロ 自動性の動詞から〔何カガ何々シタ結果デキタモノ〕

余り・固まり・氷・集まり（点の―）・くぼみ

「氷」は水などが零度以下に冷えて、こおって固形状になってできるものである。「くぼみ」は「骨と骨が擦れ合って、

軟骨にくぼみ「ができた」では変化の結果できたわけであるが、「船が海底のくぼみに沈んでいる」では単に周りより低くなっている所で、実際は変化は問題ではない。「集まり」も「村の集まりに出た」では人が集まった結果できるものであるが、「点の集まり」は点がもともと近い所にたくさんあるばあいが多いだろう。

### 3 動作・作用の主体〔何々スルモノ・人。ソレ（ソノ人）ガ何々スル〕

イ 主体が人である場合〔何々スル（コトヲ業トスル）人〕

見習い・付添い・流し（ギターの）・すり・酔払い・船乗り

ギターの「流し」（頭高型アクセント）は、ギター一本で客を求めて街を流す（職の）人である。「ほら吹き（がまたほらを吹いた）」もここに入る例である。「成り上がり（が何を言うか）」も同様で、「成り上がり者」という明示的な形もある。

ロ 主体が人以外である場合〔何々スルモノ〕

流れ（〓流れるもの）・妨げ（〓妨害物）・支え（〓支えるもの）

「流れる」と、それから転換した「流れ」の関係をとらえることはむずかしい。「流れを止める」では「流レルコト」で「イ」、「空気の流れが悪い」では「ハ」、「川（の）流れが音を立てている」ではこの項である「コト」、「清らかな流れに沿って歩く」では場所「で」と二応考えておく。「支え」は「歯周の組織が歯の支え」（原義）のように物を安定させる主体は物であるが、「妻が裕次郎の支え」（転義）のようににはげまし助ける意味では広い対象が主体になって「人以外」とはかぎらないことがわかった。

### 4 動作・作用の客体〔何々スルモノ・人。ソレ（ソノ人）ヲ何々スル〕

つまみ・差入れ（〓差入れ品）・手提げ・下ばき・外出着・雇い（〓雇員）

動詞とヲ格で結びつく関係にある対象に意味が移行しているものである。「手提げ」は、あまり重くない物を入れ、それ

を手に提げて持ち運ぶ、ある種の入れ物で、入れ物の類別を明示するには「手提げカバン（かご・袋）」などの語がある。

5 動作・作用の手段〔何々スルタメノモノ。ソレデ何々スル〕

はかり・はたき・カン切り・ネジ回し・靴下止め

動詞と、手段を表すデ格でかかわりあうものを連用形名詞が意味しているものである。「カン切り」は、「ソレデ（ソレヲ使ツテ）カンヲ切り、カン詰メノフタヲアケルモノ」というわけである。

6 動作・作用の向けられる目標〔何々スル（タメノ）モノ。ソレニ何々スル〕

こぼし・糸巻き・一輪差し・ようじ入れ・洋服掛け

動詞の表す動きが、それに向かつてなされるものを、連用形名詞が表しているものである。動詞と、目標を表す二格で関係するものを意味するものである。「こぼし、一輪差し、ようじ入れ」の三者は、そのものの中に何かを入れるための入れ物とも言えよう。

7 動作・作用の行われる場所〔何々スルトコロ〕

通り（＝道）・果て（地のー）・受付（＝受け付ける所）

2口にあげた「くぼみ」は、「くぼんだ部分、所」という意味に使われる場合は、ここにも属する例である。現代的な例ではないが、「渡し、船着き」は場所であり、「渡し場、船着き場」とともに行われた語形であった。<sup>（注4）</sup>

8 動作・作用の行われる時間〔何々スルトキ〕

暮れ・日暮れ・夜明け・夜更け・終り

「暮れ」に対して「暮れ方」があり、「日暮れ」に対して「日暮れ方」があり、文語的ながら時間帯を明示する類義語である。

## 四 人工物を表す連用形名詞について

諸品詞の中で、名詞は数が他の品詞よりはるかに多くあり、また、それらの表す意味の範囲も非常に広い。連用形名詞は名詞全体からみて、その一部分を占めているにすぎないが、ものごとの名付けの上で、どのような仕方でも役立ち、寄与しているのであらうか。そのことを、わりあいやりやすいかと予測される名詞の一方面について探ってみることにする。それは、目で見たり、手でさわったりできる物体の中で、人間の作りだした人工物を指示する名詞のグループを一つの大きな範囲として取り出して考えてみることである。

人工物には、多くの場合、その作られる目的があり、それは同時に人間生活の上で役立つ働き・機能でもある。この点からみて、ありはしないかと想像される語形成様式として「(人ガ) Zデ (Zヲ使ッテ) YスルタメノZ」というタイプが考えられる。(形式的には一節に述べたAまたはB) たとえば、三節の5 (動作・作用の手段) の例にあげた「はかり(秤)」と「はたき」はその例ではないか。「はかり」は「(人ガ) ソレデ (物ノ目方ヲ) 計ルタメノモノ (道具)」で、漢字表記は別(計と秤) になっているが、「計る」とのつながりの意識はかなり保たれていると思う。(「台ばかり、竿ばかり、てんびん」などは「はかり」を類別する下位語である) 「はたき」は「(人ガ) ソレデ (室内ヤ器物ヲ) ハタイテホコリヤトルモノ」ということが名付けの動機になっている。

右の二語の他に同じタイプの語を探してみると、なかなか見つからない。「肥やし」は、現在「肥料」の方が多く使われるが、「芸の肥やし」のような転義ではよく使われていて、原義は「(人ガ) ソレデ (地味ヲ) 肥ヤス (肥エサセル) タメノモノ」なので、ここに該当する語である。もう一つ、「飾り」も「(人ガ) ソレデ (何カヲ) 飾ルタメノモノ」と理解すればここに該当するが、「ソレガ (何カヲ) 飾ル」という名付けの動機であるとすれば別となり、三節の3口(動作・作用の主体) の例ということになる。

右の四語のような他動詞の名詞化だけによる名付けは、単純過ぎてあまり広く命名の必要を満たすことはできないのであろう。他動詞とその目的語を組み合わせた「名詞X(目的語)+動詞Y(他動詞)」「二節の分類ではEに入る」の形式で「(人ガ) ZデXYスルタメノZ」という構成の語はより多く見出される。たとえば、「つめ切り」は「(人ガ) ソレデ(手足ノ) ツメラキルタメノモノ(道具)」という内容の構成であり、他に道具の種類を明示する「つめ切りばさみ」という語もある。三節の5(動作・作用の手段)の「カン切り・ネジ回し(ドライバー)」という外来語が多く使われるため、あまり使われない語になった)・靴下止め(これも使われないようになった)の三語も同様の例である。この様式の語は、日常的に使われる用具にその例が多い。多少類別的にみると、食器・調理具類(湯のみ・湯沸し・茶こし・なべつかみ)文具類(鉛筆削り・インキ消し・黒板ふき)薬品・衛生用品類(血止め・せき止め・熱冷まし・虫下し・虫除け・歯磨き・白髪染め)日用品など(目覚まし・耳かき・手あぶり・垢すり)などがある。右にあげた語の中には、「湯沸かし器」鉛筆削り器、咳止めぐすり、歯磨き粉、目覚まし時計」などのように、道具の種類を明示する類義語が並存しているものもある。「歯磨き粉」の「こ」は、「こな」のほうが独立の名詞としてはより多く使われるが、造語成分としては「うどん粉、そば粉・メリケン粉・・・」のように盛んに使われている。「歯磨き粉」は本来の粉状のものはすたれて、クリーム状でチューブに入ったものが多くなっているが、従来通りの呼び方もされることも多くあつて、その場合には現実の変化によって実体と呼び方の間にずれが生じているわけである。右にみてきた造語様式は、三節で5(動作・作用の手段)としてあげた名詞化のタイプに該当する。

右と近いが、区別することもできるタイプとして、「(人ガ) ZニXYスルタメノZ」と表せるもので、「名刺入れ、紙挟み、はし置き、ひじ掛け、花生け、本立て」のような語がある。「Zニ」の代わりに「Zヲ使ッテ」と考えれば、右のタイプと一緒にということになる。これは、三節の6(動作・作用の目標)に該当する。(注5)

次に、人工のものが連用形名詞で指示される別の様式として、それが作られる過程（素材とそれに対する働きかけ）を示すことよって、過程の結果として生じる産物をさすようになるものがある。それは料理関係に多く見出される。まず、日本では特に種類が豊富である漬物を、それぞれの香味材料で特徴づける「塩漬け、味噌漬け、粕漬け、麴漬け、酢漬け、砂糖漬け、ビール漬け」などは、「香味材料ニ（野菜や魚介類ナドヲ）漬ケタ結果デキルモノ（食品）」（一節での分類では「名詞など十動詞」のEに入る）という内容の構成である。より具体的には「桜葉の塩漬け、ごぼうの味噌漬け、あわびの粕漬け、にしんの麴漬け、ままかり酢漬け、にがうりのビール漬け」のような連語によつて指示されることが多い。

ただし、形式的には同様な「(名詞など十) 漬け」という語構成でも、「梅漬け、わさび漬け」など前項が漬物の主な材料を示す名詞であるもの、「奈良漬け、沢庵(漬け)」など関わりのある地名や人名であるもの、「浅漬け、早漬け、一夜漬け、即席漬け、かりかり漬け」のように前項が副詞的に「漬け」にかかるもの、「あちゃら漬け」のように外来語であるもの、などさまざまなものがある。

「漬ける」は発酵作用を利用する食物調整法を表す語として、日本語の基本的な料理動詞の一つであるが、「焼く、煮る、揚げる・・・」などの加熱調理の面でも「漬ける」のばあいとやや似た連用形名詞による食品の名づけがみられる。たとえば、「あゆの塩焼き」は、「主ナ材料デアルアユニ味付ケラスル塩ヲ加エテ(焼ク)トイウ加熱調理ヲシタ結果デキルモノ(料理)」をさしている。一般化すると「主ナ材料ニ味ヲトノエル材料ヲ加エテ動詞ソレゾレノ方法ニヨル加熱調理ヲシタ結果デキルモノ(料理)」という内容である。熱だけを用いる「焼く、いる」については「いのししの味噌焼き、ぎんなん塩いり」、水分をも用いる「煮る、ゆでる、蒸す」については「竹の子の水煮、あわびの塩煮、枝豆の塩ゆで、はまぐりの酒蒸し」、油を用いる「揚げる、いためる」については「あなこのオリーブ油揚げ、きのこのバターいため」のような例がある。<sup>注6</sup>右に見た料理関係の語はすべて、三節の2（動作・作用の所産・結果）のイ（他動性の動詞から）に該当する。

以上、連用形名詞が使われている料理関係の語の中で、やや目立っていると思われる、「名詞など十動詞」(E)の中の

二つのタイプだけに注目した。料理関係の語の中から広く連用形名詞を少し拾うと、「揚げ（＝揚げ物）」（すずきの）洗い、（かつおの）たたき（A）、「煮込み、煮含め、炊き合わせ、炊き込み」（B）、「蒸し焼き、包み焼き、蒸し煮、揚げ煮、いため煮、含め煮」（C）、「煮焼き」（D）、「土瓶蒸し、つば焼き、釜揚げ」（E）前項は調理用の容器など、かなり多く見出すことができる。

### おわりに

第四節での試みは、ほんのさぐりを入れるに止まってしまった。はじめから予想されたことではあったが、連用形名詞が人工物を表すことに役割を果たしているのは、日常卑近の生活臭の強い方面であるということが、試みを通して実感された。

なお、第二節で有縁性のつよい語に限定して考察の対象にすると述べたことは、主要な語例については実践できたと思うが、中心的でない語については十分とはいえないものも多少含まれていると思われる。

〔注1〕「摘み草、突き指、もらい湯」などのように、「動詞連用形十名詞」の形式でありながら、前項の動詞が意味の中心で、連用形名詞とも呼びたい複合名詞もある。（西尾1998）しかし、それらは散発的なものであり、ここでは取り上げないことにする。

〔注2〕岡村正章氏は、「乾くこと」という表現に対比して、連用形名詞「乾き」（洗濯物の乾きが早い）は動詞の語彙的な意味を表す「行為・動き・作用のさま」をまとめあげるといふ性質をもち、「乾き＝乾くこと」ではなく、「乾き＝乾くさま・乾き方」の方が適切であると述べている。そして、動詞の「行為・動き・作用のさま」を表すものを「典型的な連用形名詞」と捉えているので、それは小論ではこの1ハの項に相当するものと理解される。（岡村1995）

〔注3〕「がぶ飲み、ぐい飲み」は「飲む」という行為の様態であることを語形自体が語っているが、「酒飲み」は人間であり、「湯飲み、

吸い飲み」は道具であることを語形は表していない。前者は語の意味の種類について明示的な語であり、後者は非明示的な語であると、小論では呼びたい。(山下1994)

(注4) 「渡し」は「渡し場」の略である(柴田・山田2002の47頁)としても、それが(ある時期の)社会に通用する語形であれば、一つの単語としての存在を認める立場を、ここではとりたい。

(注5) (四節の初めからここまでの全体に関する注) 四節の原稿が完成してから、池上1978の第五章「意味の変化」の4「意味の近接性に基づく場合」の中に、「・・・あるもののよく使われる用途を表わす表現が、そのもの自体の表現に転用されるということもある。例えば、「本立て」、「紙バサミ」、「爪切り」、「筆入れ」、「耳搔キ」、「水差シ」などと言った場合である。」という一節を見つけた。六つの語例がいずれも連用形名詞であり、また筆者の探したものがこれにかなり一致していることにおどろいた。(これは、あてはまる例があまり多くないということを物語っているのもあろう。)また、「用途」→「そのもの自体」という、共存関係にある二つの事項間の近接性にもとづく「換喩」として説明されていることが興味深い。

(注6) 「焼く、煮る、揚げる」などの分類については国広1982の155ページの分析によった。

## 文献

- 池上嘉彦 (1978) 「意味の世界 現代言語学から視る」(NHKブックス 330)
- 岡村正章 (1995) 「典型的な動詞連用形名詞」に関する一考察」『国文学論集』28上智大学国文学会
- 影山太郎 (1993) 「文法と語形成」(ひつじ書房 日本語研究叢書 第二期第四卷)
- 国広哲弥 (1982) 「意味論の方法」(大修館書店 日本語叢書)
- 柴田武・山田進 編(2002) 「類語大辞典」(講談社)
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『現代語彙の研究』54、84頁 1988 明治書院 もと、「国語学」43に発表
- 西尾寅弥 (1998) 「摘み草」タイプの複合名詞について」(大妻女子大学文学部三十周年記念論集)
- 山下喜代 (1994) 「湯飲み」と「酒飲み」はどう違うか?」『国文学 解釈と教材の研究』39巻14号 学燈社)
- Ernst Leisi 著 鈴木孝夫訳 (1960) 「意味と構造」(研究社出版株式会社) DER WORT INHALT SEINE STRUKTUR  
IM DEUTSCHEN UND ENGLISCHEN (Quelle & Meyer · Heidelberg 1953)